様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ７ 月 ３０ 日現在

機関番号：４４４１２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９３４９４

研究課題名（和文）ウェルビーイングピクチャースケール日本語版作成の試み

研究課題名（英文）An Attempt at Creating a Japanese Version of the Well-Being Picture Scale

研究代表者
中野　雅子（NAKANO, MASAKO）

大阪信愛女学院短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：９０３６２３７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円、（間接経費）　　1,230,000円

研究成果の概要（和文）：認知症予防介入に使用することを目的に、『活き活きしているか』『力強いか』等15項目を絵で7段階に心理測定する米国版ウェルビーイングピクチャースケールを、日本版に改訂することを試みた。
まず軽度認知障害（MCI）高齢者へのナラティヴアプローチ、「物忘れ外来」での『看護外来』から高齢者心理を分析し、それぞれを国際学会で発表した。次に280名の健常高齢者（平均69.6±7.5歳）に対し、米国版により心理分析とともに自由記述を依頼したが、絵の誤認、迷い、尺度と理解されない等多数問題点が抽出された。それらを基に日本の高齢者に適した絵に改訂し、現在約300名の高齢者へ試み、使用可能性を検討している。

研究成果の概要（英文）：We attempted to modify the Well-Being Picture Scale for use in Japan for dementia prevention. The WPS consists of 15 items on psychological well-being, All items are illustrated with drawings and rated on a 7-point scale.
We adopted a narrative approach for older individuals with mild cognitive impairment,analyzed their mental states based on preliminary examinations conducted as a part of "outpatient care for dementia "and then reported the results at an international academic conference.We then requested 280 healthy older individuals to complete the WPS and to provide descriptive open answers. However, we identified many problems, as some participants misunderstood the drawings, hesitated, and were unable to understand the pictures as a scale. Based on these findings, we have modified the drawings so that they are better suited to Japan's elderly people, and we are now examining the possibility of using them in the future by piloting the Japanese version on 300 older individuals.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：社会系心理学　看護学　老化　臨床

１．研究開始当初の背景

認知症早期診断において軽度認知障害（Mild Cognitive impairment ；MCI）と告知され地域で生活を続ける高齢者は、心理的負担感が大きく、うつ傾向に陥り易いことから家族を含めた社会的な介入の必要性が高まった。

介入研究では、QOL 評価尺度、心理尺度等繰り返し使用するが、高齢者の負担感を極力抑える必要性がある。

多くの心理尺度が開発される中で、米国の看護研究者（Guerudner,2006）らが開発した心理的 Well-being 評価尺度であるウェルビーイングピクチャースケール（Well-being Picture Scale ；WPS）は、10 項目の対極性の絵で構成され、「英語テキストや長い複雑な測定用具に応じることが困難な人、あるいは重い病気の人など可能な限り広範囲な成人の人々を対象にした非言語ベースの心理尺度である」とされ、既に信頼性・妥当性が検証されていた。

そこで京都府および大阪府下の男子 22 名（24.2%）女子 69 名（75.8%）合計 91 名の学生（平均年齢：20.85±3.0）を対象に、英国で開発された精神的健康度を診断する心理検査 GHQ の短縮版 GHQ28(中川,大坊,1996)と、寺崎ら（1992）が日本人向けに開発した複数の多様な多面的感情状態を同時に測定する尺度多面的感情状態尺度【短縮版】を用いて日本における WPS の心理尺度としての信頼性と基準関連妥当性を検証した。

更に、WPS の絵の日本における使用可能性の検討として、「この絵が何に見えますか」の問いへの自由記述に若い世代での解釈としての誤りがないかを確認した。

検証結果は、有効回答数 88（96.7%）で Cronbach α係数＝0.8 であった。WPS の基準関連妥当性の検討として WPS の各項目と外部基準の下位尺度得点とのピアソン積率相関係数 r 値を算出した。r 値が高かったのは、＜WPS 総合得点＞と＜GHQ28 総得点＞が r＝－.437、P=.000 で有意に相関した。多面的感情状態尺度【短縮版】では、２つの下位尺度のうち、＜倦怠＞の＜WPS 項目 P１＞との相関が r =-.505、また＜P2＞との相関も r =-.402 を示し、＜WPS 総得点＞との相関は r =-.515 と 0%水準で有意な負の相関を示した。また＜活動的快＞も、＜P2＞との相関が r =-.390、＜WPS 総得点＞との相関が r =.489 で有意な正の相関がみられた。従って外部基準との関連妥当性は確認できた。

絵の誤認をみる自由記載の内容は、絵の意味の解釈に大きな飛躍はないが、一致していないものがあった。絵そのものの誤認は 11 件（1.2%）、対極性の表現となっていなかったのは 31 件（3.4%）であった。

２．研究の目的

（１）MCI 高齢者の心理傾向を明らかにする。

（２）日本における WPS の健常高齢者および MCI 高齢者への使用可能性について、問題点、改善点を明らかにする。

（３）（２）の情報をもとに、原版の絵に修正を加え、日本語版 WPS を試作し、健常高齢者を対象に信頼性・妥当性を検証する。

（４）日本語版 WPS を使用し、虚弱高齢者、MCI 高齢者の Well-being（一般的幸福感）を測定することを試みる。

３．研究の方法

（１）①京都市内 K 医院を受診し、最終的に K 大学医学部附属病院専門外来において MCI と告知を受けた男女の高齢者 5 名について、半構成面接法を実施し、語られた記憶に関連する経験を聞きとり、承諾を得てテープ録音した。3 名の女性は単独で、男女各 1 名は家族とともに行った。得られたデータを逐語録

に書き起こし、質的帰納的に分析した。
②S 大学医学部附属病院「もの忘れ外来」を受診する高齢者を対象に、診察医の協力を得て『看護師による相談外来』を実施した。得られた年齢、性別、現症、相談内容データを整理し、分析・検討した。

（2）300 名の男女の健常高齢者を対象に、米国版 WPS および GHQ28、多面的感情状態尺度【短縮版】、15 項目版高齢者抑うつ尺度 GDS-15 により調査を実施し、日本人高齢者対象の心理尺度としての信頼性と基準関連妥当性を検証した。また「この絵が何に見えますか」の問いに対する記述内容を分析・検討した。

（3）300 名の男女の健常高齢者を対象に、（2）の結果をもとに修正された日本版 WPS および GHQ28、多面的感情状態尺度【短縮版】により調査を実施し、日本人高齢者対象の心理尺度としての信頼性と基準関連妥当性を検証をする。さらに「この絵が何に見えますか」の問いに対する自由記述欄を設け、内容を分析・検討する。更に2）で得られたデータと比較・検討した。

4．研究成果

(1) ①a)軽度認知機能障害の記憶と関連した心理的経験への知見を得るため、3名の女性高齢者に対し半構成的インタビューを行った。得られたデータは質的帰納的に分析した。その結果、101 のコードが抽出され、またコードは 12 のサブカテゴリーへさらに最終的に 4 カテゴリー≪記憶への確信の変動≫≪日常生活(ADL)の活動低下を受理する準備≫≪毎日の生活の能力の再確認≫および≪記憶力悪化への防御手段開発≫へ統合された。

b) Participants ware an elderly man with his wife and an elderly woman with the daughter-in-law. Data were collected using semi-structured interview to 2 of the family and analyzed by the qualitatively inductive method. As a result there were 212 codes extracted from the interviewing recodes and then the codes were sorted into 37 sub-categories. Finally we got 8 categories they ware "Negative feelings to family member" "Social participation evasion" "Receipt feelings of disease" "Action desire for health" "Respect between families" "Non-treatment decision feelings" "Life defense feelings" "Self-dignity feelings".

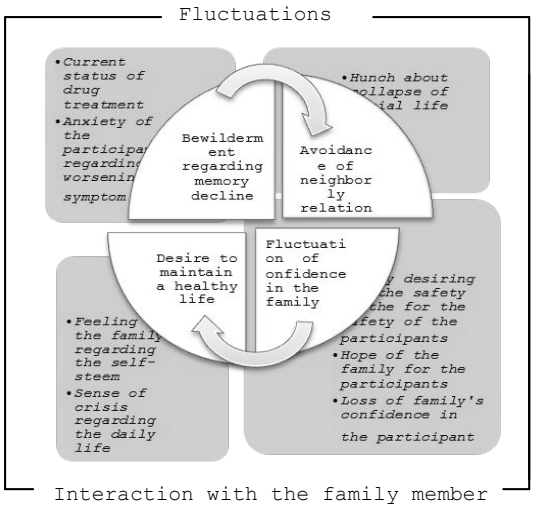

Fig.1 Conception diagram by each category connection

②17 interviews of chief complaint about forgetfulness were carried out by nurse from early February to early April this year. Patients were seven men and nine women, and the average age was 75.5 years old. The mean of the score of Mini Mental State Examination was 17.7 from 27 points to 11 points. It was three MCI patients, four Alzheimer's disease

patients, doubt of the dementia of eight people, other diseases of two people. After the therapeutic nursing interview 79 complaints were recorded in a notebook. And then those complaints were sorted into 11 categories. These categories are as follows: I forget a past episode, I forget the name of other people, it is hard to do a calculation, I forget a planned matter, I cannot use tools, I cannot achieve a work role, living will decreased, it is not a fact to talk, the mistake of season and time and the place, I cannot control feelings, I lose a belonging.

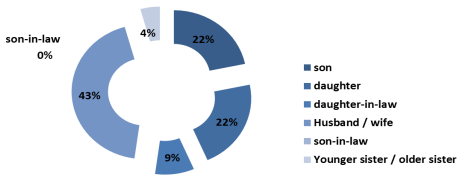

Fig. Interaction with the family member

(2) 55～84 歳の男性 128 名、女性 152 名合計 280 名(平均年齢 69.6±7.5 歳)であった。GHQ28 の信頼性係数α＝0.95、GDS-15 の信頼性係数α＝0.80、WPS の信頼性係数α＝0.76 であった。WPS の外部基準関連妥当性は複数の項目において弱い～やや強い関連性（ピアソン積率相関係数 r＝0.121～0.397）を示した。＜WPS 合計点＞と＜GHQ28 合計点＞は r＝0.411（P＜0.01）で相関していた。最尤法ブロマックス回転による探索的因子分析では 2 因子を抽出し、＜第 1 因子:活動性…P4, P7, P8, ＞＜第 2 因子：抑うつ・不安…P1, P3, P6, P9＞とした。今回の調査では、強い関連性は検証しなかったが基準関連妥当性と、心理尺度としての信頼性を検証した。しかし自由記載欄の分析では、①絵を前にした高齢者の心象や心理的変化が表出される、②絵を「わからない」と答える、③7 件法として捉えられていない、④選択の迷いが表出されるなどがあり、高齢者を対象とする場合、更に項目数や 7 件法の検討などが必要であると考える。また絵を「わからない」と答える例では、日本の高齢者への絵の工夫の必要性が示唆された。しかし絵は、会話の場面で媒体となり、場を和ませ、繰り返し使用する心理尺度には長所となりうると考える。

5．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

Masako Nakano、 Shinichi Sato、 Jun Nakahara、Emotional Experiences of the Community- dwelling Elderly With Mild Cognitive Impairment and Their Families、The Journal Neurospychological Trends (12 Nov-12 156 Pages)

〔学会発表〕（計 5 件）

① 中野雅子、江頭典江、中川威、石岡良子、権藤恭之、佐藤眞一、米国版 The Well-being Picture Scale の我が国における使用可能性の検討～心理尺度としての信頼性・妥当性の検証 ～、第 6 回日本応用老年学会

② Masako Nakano、Setsuko Ota、Aki Shimanouchi 、 Shinichi Sato 、Psychological experience related to the memory of an elderly woman with mild cognitive impairment、The 1 st Global Congress for Qualitative Health Research 2011

③ Masako Nakano、Yoshitomo Shirakasi、Toshiyuki Watanabe、Akihiko Shiino、Aki Shimanouchi、Shinichi Sato、The therapeutic nursing interview for the purpose of the early diagnosis of Alzheimer's disease in outpatient department、Alzheimer's Association International Conference 2011

④ Masako Nakano、Jun Nakahara、Aki Shimanouchi、Shinichi Sato、Takeshi Nakagawa、Emotional Experiences of the Elderly Persons with Mild Cognitive Impairment and their Family living in the Community、Second Global Congress for Qualitative Health Research

⑤ 米国版 Well‐being Picture Scale の我が国における高齢者用改訂版作成の検討 軽度認知障害，健康障害を持ついわゆる虚弱高齢者への活用に向けて～、中野雅子、権藤恭之、中川威、石岡良子、佐藤眞一、第 55 回日本老年社会科学会

〔図書〕（計 0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中野　雅子（NAKANO　Masako）
大和大学・保健医療学部・看護学科・教授
研究者番号：90362376

(2)研究分担者
椎野　顕彦（SHIINO　Akihiko）
滋賀医科大学医学部附属病院・神経難病研究推進機構・分子神経科学研究センター・准教授
研究者番号： 50215935

江頭　典江（EGASHIRA Norie）
大和大学・保健医療学部・看護学科・講師
研究者番号：70547463

(3)連携研究者
佐藤　眞一（SATOU Shiniti ）
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：40196241

権藤（GONDOU　Yasuyuki ）
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号：40250196